

「参加報告書」

京都大学経済学研究科 D2 竹内亮

私は2014年10月から翌2015年3月にかけて、ベトナム国家大学工業技術大学内のFIMOセンターにおいて研究を行う機会をいただいた。今回の滞在は、私にとって2度目のベトナム滞在であったが、海外で長期的に研究を行うのは初の体験であった。研究の内容を簡潔に言えば、高度経済成長によりベトナムの農村部がどのように変化しているのかを把握することであった。これは現在の日本の農村部の荒廃が、1950年代からの高度経済成長に起因するという指摘を念頭に置いたものである。普段は研究室で資料収集やセミナーへ参加し、ベトナムの多くの地方に視察のために足を運んだ。また、フート省ラムタオ地区ティエンキエン村でワークショップを開催し、調査票を用いてヒアリング調査を行った。2月18~23日にかけての予備調査を行い、現地の人民委員会の許可を得たうえで、3月14,15日に文化会館において2度に渡りワークショップを開催した。その成果として、部分的にはあるがベトナム北部の農村の現状を把握することができた。これらの成果は、論文にまとめたうえで発表する予定である。

今回の滞在により、ベトナムから見た世界という新たな視点を持つことができるようになったと感じている。そして、この経験は今後の学習に大きな影響を与えると感じる。特にベトナムの農村部の方々と交流により「開発」とは何か、「豊かさ」とは何かということ深く考えるきっかけになった。研究室の学生、研究者との日常的な交流も刺激的な体験であった。ベトナムの人々は人間関係を非常に大事にしていることを様々な場面で実感した。例を挙げれば、食事やスポーツを同僚と行うことが非常に多く、私もよく一緒にさせてもらった。海外の学生、研究者との議論により自分の意見の発信力にも自信がついた。今回の滞在で培った人間関係は今後の研究にとって大きな力となることを確信している。ベトナムでは日本以上に、コネクションや信頼といったものが現地調査はもちろん、資料の入手においても重要なためである。

プログラムの内容としては、金銭面で大いに助けていただいた。特に航空券の往復料金を頂けたのは非常に助かった。一方で長期滞在になると保険料などの自己負担が少なくはなかった。私の場合、当初のプログラムによれば、同ベトナム国家大学内の外国語大学に滞在する予定であったが、連絡が取れないため実現が困難となった。そのため、ベトナム人のゼミの先輩の伝手を頼り自分で滞在先の研究室を探すこととなった。またビザについても学生ビザが取得できなかったために、3か月のビジネスビザで渡航し現地で更新することとなった。現地での滞在先に関しても自分で探す必要性があった。プログラム全般に言えることではないかもしれないが、こうした学生の裁量権が大きな点は、自由度が高いという反面、海外での経験が少ない学生にとっては困難な部分となるかもしれないと感じた。また現地での行動計画についても、裁量権が大きいため、このプログラムは海外交流というよりも海外でのプロジェクト、研究の助成という側面が強いのではないだろうか。しかし、この裁量権の大きいということは、私にとっては非常にありがたいことであった。一方で、現地での慣れから京都大学の事務局との連携を怠ってしまったことを反省している。

今回の滞在は、今後の進路に非常に大きな影響を与えるものになったと考える。研究に必要なデータを手に入れることができたことはもちろん、先に述べた現地の研究者や学生といった人々との繋がりができたことは、本当に大きな財産である。しかしながら、今回の滞在では遂行したかったことをすべてできたわけではなく、また新たに知りたいことも多く出てきた。今後も継続的にベトナムで研究を行うことを強く望むようになった。将来的には、ベトナム及び日本での研究活動や教育活動を通じて日越関係の発展の一助になりたいと願っている。

ティエンキエン村でのWS 一日目



ティエンキエン村でのWS 二日目



研究室での打ち合わせ



里山に関するプレゼンテーション



FIMO 研究室でのキャンプ